明治の佐伯三青年

龍溪・鳴鶴・鶴谷

御手洗一而
（賛助会員・埼玉県川越市）

一枚の羽織

矢野が初等担当の教師として、素読や歴史を教えながら、独自の英学に励む頃、林も先輩達に知られ、その才能を福沢先生に認められるようになっていた。そして、明治七年の一月に、『学問のすゝめ』第四編が刊行されると、二人は先を争うようにこれをむさぼり読んだ。それは、当時明六社有識者等の物議をかもした「学者の職分を論ず」である。しかし同じ頃、諸学者の論争とは別に、国民運動のさきがけともなる民権運動の騒動がもち上った。矢野や林が、のちにこの民権思想運動の先駆者として論陣をはるために、こゝでは、少しくその端緒を記しておきたい。

征韓論に敗れて西郷参議とともに下野した板垣・後藤・副島・江藤等が、政体の矛盾を協議したことは前に書いた。たまたま英国から帰朝していた小室・古沢が、欧州列国の立憲政体にならって、わが国に民選議院（国会）を開設すべく後藤に説いたので、後藤は二人を板垣に紹介して、建白の起草にとりかゝる。一方ではこの趣旨を民衆に訴えるため、幸福安全社と称するクラブ組織を作ったが、更に多数の同志を得て、明治七年一月十二日愛国公党という政治結

社に発展した。

この愛国公党の命名について、板垣は、「軍ニ党派トイフ時ハ私党ノ如クニ感ジ、却ツテ誤解ヲ招ク恐アリ。故ニ新党ノ命名ニ当ツテ、予輩ハ特ニ公党ノ名ヲ択ビタルナリ」と述べている。この私党の危懼は建白書八名の連署にも現われている。下野したものばかりが、政体変革の建白をすると、一種の謀叛ととられるのを心配して、現職の役人を勧誘することにした。それが、五ケ条御誓文の起草者である由利公正と福岡孝悌であった。福岡は上手に逃げたが、東京府知事であった由利は、やむを得ず署名して「民選議院設立の建言」として左院に提出されるのが十七日のことである。そしてその全文が、英人ブラック創刊の新聞「日新真事誌」の翌日号に発表されたから問題となった。

一口に云えば、「方今政権ノ帰スル所ヲ察スルニ、上帝室ニ在ラズ、下人民ニ在ラズ、而シテ独リ有司ニ帰ス」ということである。これを言論機関がとりあげたため、論議が集中することになった。すなわち、加藤弘之の尚早論・愛国公党同志の反論・馬城台二郎こと大井憲太郎の設立論とかまびすしく、明治日本の新思想として自由民権論のさきがけとなった。

塾生に影響のある福沢は、あえて批評を避けたものか、「近来世間に民権論の説を唱ふる者あり。其得失は姑く閣き、都て世に之を好むものあらざれば其物の通用する理ある可からず。飯なり酒なり、民権の論は飯と酒の如し」という言葉を吐かせたのみに止まっているが、学業第一の矢野や林は、古老の説話にある如く、耳をふさいだに違いない。

それでも矢野は、教師時代に、「民権の矢野」という綽名をつけられている。やはり、政治に関心をもつ点では、塾生でも筆頭ではなかったかと思う。演説の練習も政治教育に役立ったが、福沢は一般大衆に対する思想開発も忘れなかった。大衆向けの平易な機関雑誌を発行することにして、智恵の指南『民間雑誌』を発行した。

矢野は、第三篇六月号に「商ニ告ルノ文」として、初めて筆をとった。これが矢野の公にされた最初の小論である。創刊号に、師の福沢が論じた「農ニ告クルノ文」をうけたものである。論旨は、「人民富メバ国強ク、人民貧シケレバ国弱シ」として、その資本は商社商会を結

び、「五人六人相集り、智恵モ資本モ取集メ」、英国商人のあり方を説き、世界に眼を開いて、商人の心次第を喚起している。英学の実習が実った最初の結晶であった。尊敬する師と連名された雑誌を手にしたときの矢野の感激は格別であった。

良き批評者である林は、このときは演説会のときのようなケチはつけなかった。文章を作ることには誰にも負けない自信をもっていた林も、随所にみる英書の引用には、まだ浅学の自覚をぬぐい切れなかったからである。

最上級生になって、諸先生方に認められてきた林は、苦学生ながら奔放な生活を送っている。若者のはけ口はやはり酒がつきものだった。仕送りがくると、仲間と連れだって安料理屋に遊んだ。酒につれて人生を語り、天下国家を論じるのも当時の書生気質であったが、規則のうるさい厳格な塾では、失敗もあった。

征韓論の起った頃、矢野をはじめ、林・箕浦等と荘田先生の送別会を催したことがある。塾では、教育活動発展のため、昨年の十月に大阪の分校を開校している。この分校設立の主唱者である荘田が大阪に立つのを記念して、同県人が集まって送別の宴を張ったのである。その帰りみち、林と箕浦は真赤な顔をして、三田の山を上っていた。そこで散歩中の福沢先生にぱったり出会った。塾内の酒は禁じられていた。二人は、荘田先生の送別会のことを話したが、福沢先生は黙って見つめたまゝなにも云わなかった。二人には、その方がかえってこたえた。それ以来、外出先から一杯やって帰るときは、山を上がるのが鬼門となったが、反面若者のスリルもあった。しかし、福沢先生だけは苦手であった。

林は、休みの日は、前日から矢野邸に帰ることもあった。この頃の林は、家族の一員というよりも、矢野と兄弟同様であった。矢野家の書生に漢学を教えたり、武雄・貞雄兄弟と話すのも楽しみの一つだった。執事をしていた従兄の山口が、上京して会えるのも張りつめた気持ちを休める一時であった。いつも貧乏暮らしで圧迫される林にとって矢野邸だけが憩の場所であった。

矢野は、そんな林の身なりまで気をつかった。当時の塾生の服装は、ぼろ着物に角帯、雪駄か下駄をつゝかけていた。しょんぼりしている林を見ると、矢野の方がたえられなかった。結婚して職を得た矢野は、少しは余裕

もあった。ある日矢野は、林を呼んで夕食を共にした。

「茂吉、この羽織を譲ろう。今日はレツが羽織を新調してくれた。教師は教師らしい服装をせえと云うてな。よかったらこれを着てくれ」

矢野は、着ている黒木綿の羽織を脱いで茂吉に渡した。林は、矢野の心遣いが涙の出るほど嬉しかった。その上、帰り際にはそっと金まで渡してくれた。

「茂吉、近頃元気がないぞ。今が一番大切な時じゃないか。卒業も目の前に控えている。これで一杯やって元気をだせ」

矢野の好意に、茂吉は言葉も出なかった。

林は、宿舎に向う途中、そっと羽織に袖を通した。矢野さんに甘えてばかりもいられない。今はどうしようもないが、何かの形で恩返しをしなければならない。それにしても、俺の心配が分ったのかと察しながら、腕組みをして、とぼとぼと歩きながら、いろいろな事を考えていた。友情の羽織に、秋のそよ風があたる。この羽織が林から後に総理になった犬養が塾の苦学生中に贈られた、世にいう「三代羽織」である。

林に心配事がないわけではなかった。

貧乏にはなれているが、一身上の都合もあった。先達っての手紙で、親戚の家を継ぐ養子のことが郷里から知らされていた。三男の茂吉にとっては、あり得べき話ではあったが、学業とは別に、めんどうな気になる話であった。

翌日林は、矢野の好意に甘えて、雑念をとり払うため割烹に塾友を誘った。ふだん世話になっている恩返しの意味もあった。新橋に登楼した貧乏書生達は、この時とばかり水を得た魚のように活き活きとしていた。塾の話や国自慢、天下の形勢にまで及んで、自分が天下をとるような勢である。芸妓の三味線に合わせて放歌する者もあれば、杯を重ねて踊りだす者もある。無礼講の一夜大尽である。

林は酒が好きであった。居酒屋の安酒とちがって、今夜の酒は上等で料理もうまかった。しかしなかなか酔えなかった。そんな林に塾友達がけしかける。

「林飲まぬか。おまえが飲まぬと礼が言い難いではないか」

「茂吉、すすまぬではないか。今宵の酒は又格別じゃ。職分にすぎたる酒ほどうまいものはないぞ」

めいめいが、林といい茂吉と呼んで勝手なことを言う。林は、職分にすぎたる酒と聞いて苦笑した。福沢先生が『学問のすゝめ』に書いた、「学者の職分」「人民の職分」の職分や分限論をもじったのである。林は杯を重ねながら、やはり養子の件が頭から離れなかった。こんな一座の空気を察しながら、精悍な林に時折熱い視線を送っていた一人の妓がいた。豊吉といった。豊吉は商売柄、この林といい茂吉と呼ばれる青年書生に、どことなく人間の淋しいかげがあることに気付いていた。又そこに妙にひかれるものがあった。

中座した林を追って、豊吉はそっと後をつけた。林は二階廊下のらんかんにもたれて秋の月を眺めていた。

「茂吉さん」

豊吉は、後からそっと声をかけた。

「いやあ、とんだ席で申し訳ない」

林は頭をかきながら、一寸てれていた。

「いゝえ、天下の塾生のお話は面白うございますわ。又呼んで下さいませ」

豊吉は、丁寧に頭を下げた。そのしぐさが色っぽかった。

「いやあ、われわれ貧乏書生がこれる所ではない。年に一度のうさ晴らし、あるのは元気だけさ」

林は、素直にめんつにこだわらなかった。ため息にも似た酒臭い息を吐きながら天を仰いだ。豊吉には、そんな淡白な林の淋しさがたまらなかった。

「元気だけでたくさんよ。ねえ茂吉さん。今日の御礼に、一度だけこの豊吉に御馳走させて下さいませ。次のお休みにお待ちしておりますから」

豊吉は、純粋な御礼の気持ちもあったが、林にもう一度会いたいと思った。

皆の林を呼ぶ声にうながされて、林はそそくさと席に戻った。

この夜の宴は、皆にとっても楽しい思い出となった。豊吉は念を押すように、玄関まで皆を送りながら、林の袂の中にそっと付け文を入れておいた。

林　藤田家を継ぐ

六年から七年にかけて、明治政府のうち出す文明開化推進の政策は、学制・徴兵令・税制・土地改革と矢継ぎ

早やであった。これらに反対する農民一揆や民選議院設立運動にみる反政府運動は、従来の儒教思想と新知識による洋学思想との対立という簡単なものではなかった。混交錯綜する模索思考が、国民大衆の思想として、屈曲と激動の中にあった。

こんなときに、矢野や林が短期間ながら、一切の世事に耳目をふさいだのは、むしろ賢明であった。師の福沢が、この頃起草した『文明論之概略』の著述趣意書にある如く、「飽くまで西洋の諸書を読み飽くまで日本の事情を詳に」しなければならないとした教えと一致している。

矢野は、『西洋偉人言行録』の刊行を急ぎながら、書店を廻って手当り次第に洋書を集めていた。こんな充実した生活の中に、長女ミサの誕生を迎えたのは、二重の喜びであった。晩秋の心地よい休日に、林は矢野に貰った羽織を着こんで、長女の出産を祝った。矢野は親友の祝いの言葉も嬉しかったが、林の精気をとり戻した顔を見て安堵した。林は、祝い酒の中で、養子口の話もうちあけた。矢野は林の複雑な事情を理解したが、それ以上たち入ることは避けた。林はもう一つのことを口に出そうとしながら、遂に言いそびれてしまった。

帰途、林の足は自然に新橋の方へ向っていた。苦虫をかみつぶしたように苦笑しながら、「次のお休みの日に、必ず」と書かれた付け文を袂の中で握っていた。

林は、今の今まで決めかねていた。豊吉との約束を忘れていたわけではないが、のこのこと出掛けるのも勇気がないし、かといって、矢野の甘い新婚家庭をみると、ほのかな刺激があの夜の豊吉を連想させていた。自分の意志とは裏腹に足の方はどんどん進んでいた。

座敷に上がった林は、塾友達との宴会とはちがって、心細そうに落ち着かなかった。しかし、現われた豊吉は、全身にその喜びを表現していた。羽織を着こんですました林の方が、むしろこっけいに見えた。

「来てくれないのかと思った」

「足が向いた」

二人の会話はこれだけでよかった。

林は、悪びれずに、着ている羽織にまつわる友情を話した。一枚の羽織が、その日の出来事と林の身の上を語るのに充分であった。

酒が入ると、ふだんの林茂吉に戻った。精悍な顔、引き締った口元から、毒舌と共に漢語がぽんぽんと飛び出す。豊吉にとっては、酔客と異なるえ体の知れない興味と快感が、異様に感じられた。淋しさと誇張の青年の覇気が、女特有の本能の底にじわじわと迫ってくるようであった。林は豊吉の客であることも忘れて飲んだ。意気投合した二人に、明治の青春があった。こうして豊吉の返礼が、林のやすらぎと激励の場を作っていった。

林が正則科で定められた最終学期に、ギゾーの文明史やウールシーの万国公法を勉強している頃、矢野は、さきの『西洋偉人言行録』を甘泉堂から処女出版し、机上には、常に幾冊かの原書を用意していた。借り出した本の中に、『ローオルコンモンス』と題した本があった。矢野は、英国の議院規則を読みたいために探したが、読み進むにつれて、牧場のことばかり多く書かれ、結局、各地方における共同牧場に関する規則とわかって失望した。また、『ローカルタクゼーション』という英書の小冊子を探し得て喜んだものの、地方税制度の研究は、その内容が複雑で日夜悪戦苦闘していた。

こんなときに、矢野に大阪分校派遣の話がもち上った。矢野はそれを快く承諾した。もともと義塾の大阪分校は、矢野が入塾のさい、保証人を依頼した荘田平五郎が、発起人となって開校した塾である。その後を継ぐのも奇縁であった。矢野はいろいろなことを考えた。父光儀が県知事をしている深津県（明治五年六月小田県となる。現岡山県）の任地に近いこと、林の卒業の真近いことなど、それにもまして、暫くの間、中央を離れて学業第一にうちこむ方針を貫ぬくことに決心した。

林もこの話を聞いて、矢野の考えを理解することができた。淋しくもあったが、四年前郷里佐伯に取残されたときのような不安はなかった。この三年間、苦労の連続ではあったが、まがりなりにも義塾で学び得た感激があった。上京するときから矢野に導かれた林ではあったが、兄とも慕う矢野の生活をみても、そこには「一身独立」の良い見本があった。矢野自身、父が明治二年葛飾県大参事として一足先に上京以来、父と殆んど一緒に生活したことがない。常に自分の道を歩みながら前進してゆく矢野を見ていると、林自身にも考えさせられるものがあった。

その上、今では一人の強力な味方がいた。意気投合した豊吉が、なにかにつけて助勢してくれていた。豊吉は、逢う瀬が重なる度に、無性に林にひかれていった。好きというよりも、この男に自分の一生をかけてみようとさえ思うようになっていた。登楼の金、学資の不足分まで惜しげもなくつぎこんで、志士気取りの一書生が、やがて見る出世の姿を夢見るようになっていた。

この年の終り近く、明治七年十二月に、林は無事に義塾の正則科を卒業することができた。一応の学業を終えて明治八年の新春を喜ぶと、すぐ矢野と林の別れが待っていた。矢野は同僚の那珂通世と中井芳楠を伴って、大阪分校長として赴任した。塾に残った林は、早速に期待と不安の入り交った仕事にとり掛っていた。先年出版を始めた『民間雑誌』への寄稿である。林は、「気軽に好きなことを書け」と激励した矢野の言葉を思い出していた。矢野は林の才能を信じていた。

矢野は少年の頃、祖父の訓育から厳しい漢学の素養を積んでいる。一説には、『西国太平記』を漢訳してしまったといわれている。『西国太平記』とは九州の治乱を書いた二十巻の片仮名の版本である。その矢野が、後世「言葉の豊富な天才であった」と賞したほどの林である。林は新聞について題材を選んだ。そして、「新聞紙ヲ論ズ」の小論が、師の「未来平均ノ論」とともに、初めて活字になった。

その書き出しに自由独立を論じている。

「方今我邦不足ノ品物多キ中ニモ、智恵ト金トハ最モ非常ニ払底ニテ、薬ニセンニモ得難キニ、マダコレヨリモ乏シキ品アリ。其ヲ何物ト尋ヌルニ『フリイ・スピリット』ト云ヘルモノニテ、不羈自由ノ気象ナル」として、我邦気風の欠如を次の三害の原由としている。賞誉の溢美・従順の過度・信用の忽卒であり、『ボックル文明史』の引用から、新聞紙を例にひいて説明し、新聞のあまりに「従順抑遜の過度」をいましめ、模倣の文化を「皇国ノ文明ナリト、虚ヲ吠エテ実ヲ伝ヘ、真ノ開化ト思フコソ気ノ毒ナレ。是レ信用ノ忽卒ニ非ズシテ何ゾヤ」としている。そして、「不羈独立ノ人トナランニハ、先入主トナル彼三害ヲ除カルベカラズ」と結んでいる。

林は一躍して、その才筆を先輩や師の福沢に注目されるようになった。林の負けん気と苦学の修業が、開花し

た一つの結晶であった。

そんなある日、帰郷中だった従兄の山口がひょっこり塾を訪ねて来た。林はすぐ来訪の目的を察した。山口の口上までもなく養子の話など、どうでもよいと思っていた。

「そう決ったのならそれでよかろう」

林はあっさり肯定した。

そして、親戚の藤田家を継ぐことになって藤田茂吉と改姓した。

同月の『民間雑誌』第七編では、「政令法律ノ目的ヲ論ズ」を寄稿し、初めて藤田茂吉と署名している。なおこの第七編では、塾友の箕浦勝人が「無学ノ弊自カラ災ヲ求ムルヲ論ズ」を書いている。藤田茂吉は、この小論で、政令法律の目的として、「ハピネス・オフ・インヂビヂュワル」個人の幸福と、「ピース・オフ・ソサイチイ」社会の安全を説いている。その文章は、簡潔明快にして要を得、語彙が豊富で抑揚・起伏に富み、論法鋭く才気がみなぎっている。そして、「民ハ国ノ本」であり、「物ニ本末アリ」、「事ニ先後アリ」とするように、論説家として一家をなす理論追求の一端がうかがわれる。

二月になると、「種痘の説」は前記の漢文崩しの文体と違って、実にくだけた言文一致体になっている。智恵の指南として大衆啓蒙の実験が現われている。終りを紹介すると、「もしお種えなさるときめたなら、舶来のよい種も沢山あります。御案内いたしませう」とある。堅苦しい論文調から一転してやわらかな話言葉に奇異な感じを受けるが、この頃は、文章にしろ演説にしろ、塾ではいろいろな試験がもくろまれている。福沢の意図が、門下生を通して様々な方向に計画実行されている。

藤田は、卒業後水を得た魚のように、東西の知識を駆使して筆をとり、活躍の舞台をこしたんたんと狙っていた。

（つづく）

受贈図書（一）

九州貨幣史	九州貨幣史学会
延岡史談会報　創刊号	延岡市社会教育センター
大分県地方史	大分県地方史研究会
歴史手帖　八、九、十、十一号	名著出版
多摩のあゆみ	多摩中央信用金庫